2007年5月10日発行（毎月1回10日発行）●SJ410号
Monthly The Safety Japan
SJ
人とクルマのいい関係をめざして

5
2007 MAY

●編集室：〒107-8556 東京都港区南青山2−1−1
本田技研工業株式会社
安全運転普及本部内
電話 03(5412)1736
●編集人：千葉英雄
●年間購読料：1200円（定価1部100円・消費税込）
※郵便振替　口座番号：00170-7-173273
※加入者名：㈱アストクリエイティブ
安全運転普及本部係

今月のスポット

生徒が社会の一員として大切なことを自主的に、自分たちにできることを行う—これが交通安全を含めた安全教育の目標です。

（特集より）

CONTENTS

特集：高校生の交通安全教育—いま、高校生に伝えるべきこと ……❶
生徒自らが考え、行動できる教育をめざす
TRAFFIC ADVICE ……❹
●㈱ヒガ・インダストリーズ・ELTビギナーズクラス実技講習会／初めて三輪スクーターに触れる新入社員に運転の基礎を身につけてもらう
SAFETY REPO ……❹
●Honda Cars横浜東・安全運転講習会（磯子店・港南店合同）／車庫入れや縦列駐車などお客様の苦手解消のために
TOPICS ……❹
●交通教育センターレインボー熊本／安全運転研修コース、サーキットコース リニューアル竣工式
NEWS REVIEW ……❹
●平成18年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式
●活動短信／交通教育センター4月
OPINION ……❺
●関一／飲酒運転を防ぐことで人の命を守るハンドルキーパー運動を広げたい
SAFETY COMMUNITY ……❺
●交通安全シルバーフェスタ2007・すずか（三重県鈴鹿市）／高齢者が生活の中で実行できる交通安全の取り組みを伝える
DOCUMENT EYE (207) ……❻
●信号機のない交差点を通行する自転車利用者の左右確認状況を観察する

特集：高校生の交通安全教育——いま、高校生に伝えるべきこと

8割以上の生徒が自転車で通学しているという明石清水高校では、平成18年度から新たな交通安全教育の取り組みを始めた

ドリームモータースクールで開催されている交通安全教室では、人形を使って高校生にクルマは急に止まれないことを理解してもらうための制動実験などを行っている

生徒自らが考え、行動できる教育をめざす

免許を取得できる年齢となり、交通社会に一人前として迎えられる高校生。交通ルールやマナー、自分を守るという意識、他者への配慮など、学校教育を通して、高校生に伝えるべきことは何だろうか。実際に高校生への交通安全教育を行っている指導者の取り組みを紹介し、高校における交通安全教育は何をめざして、どのように行われるべきか、その方向性を探る

兵庫県立明石清水高等学校（兵庫県明石市）は平成18年度から従来の交通安全教育を発展させ、新たな取り組みを始めた。背景には、8割以上の生徒が自転車で通学している中で事故が徐々に増えてきていることがある。また、生徒の運転マナーについて、地域住民からの苦情も少なくないという状況だった。

明石清水高校が新たな取り組みでめざしたのは、生徒が自分の問題として、交通安全を考えることである。昨年5月、最初の取り組みは交通安全を啓発する標語の募集。全校生徒が標語を考えて、優秀なものを各クラス2本ずつ選び出し、その標語を印刷した「のぼり」52本を生徒たちが制作した。こののぼりは6月に開催した清湧祭（文化祭）や、秋の交通安全運動期間中、10月末から11月中旬のオープンハイスクール（中学生対象の学校見学会）の時に、正門前や校内に並べて掲示された。同校総務部長（元生徒指導部長）の前田達也教諭は、「この標語の募集が生徒の交通安全に対する意識を向上させるきっかけになりました。標語は誰でも簡単に取り組めるものの1つです。自分の標語がのぼりになった生徒たちは大喜びしていました」と、生徒に気軽に参加してもらえるようにすることをポイントに挙げた。また、「私だけでなく、各クラスの担任が標語の募集によって、交通安全への動機づけを図るという目的を理解してくれたことが大きい」と、教職員全員が共通認識を持てた点も生徒の積極性を引き出せた要因とみる。

生徒に交通安全への動機づけを図る目的は、生徒自らが「自分を守り、そして、他人を守る」意識を身につけることである。6月には全校生徒を対象に、「交通安全教育—自転車事故から身を守る」というテーマで、同校生徒指導部は交通安全講話を行った。

「高校における交通安全教育の目的は、生徒が交通事故の被害者にも加害者にもならないようにすること、そして、生徒が自覚を持って交通社会の一員となるための橋渡しになることです。それを踏まえてまず、伝えたかったのは事故にあって被害者となってしまった時の対応です。事故にあったら、自分一人で解決しようとしないで、必ず警察や学校に連絡すること。一方、自転車を運転していて歩行者と接触し、ケガをさせてしまい、加害者となると、高校生でも賠償責任が生じると

高校生に交通安全を考えてもらう きっかけづくりを行うことが必要

生徒たちが考えた標語を印刷したのぼり。文化祭の時などに、正門前や校内に掲示したことで、生徒の交通安全に対する意識を地域住民にもアピールできたという

〈のぼりになった標語（一部）〉

- 大切に　一度かぎりの　その“いのち”
- あぶないよ　けいたいでんわと　仲良しは
- 信号無視は死のトビラ
- 夜の道　小さな光で　助かる命
- 安全は　他人の安全　守ること
- 知ってるの？　点字ブロックは　命綱

明石清水高校総務部長の前田達也教諭

いうことです」。

さらに生徒指導部は、罰金刑以上の刑罰を受けると、就けない職業もある。交通事故は、場合によっては人生設計に大きな影響を与えることを生徒に説明している。

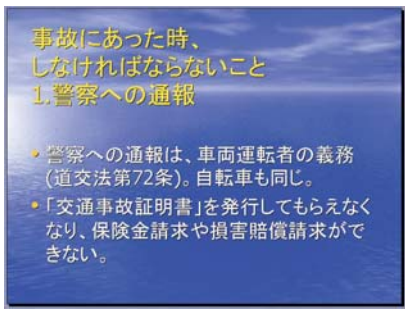
交通事故にあった時、起こしてしまった時の正しい対応を理解しておくことは、この先、生徒が実生活でトラブルに直面した場合の問題解決にも応用ができるはずだと、前田教諭は考える。トラブルに巻き込まれそうになった時の相談者として、教職員が頼れる存在であることを、生徒に理解してほしかったという。「私たち教職員も『生徒を守る』ということを忘れてはいけません」。

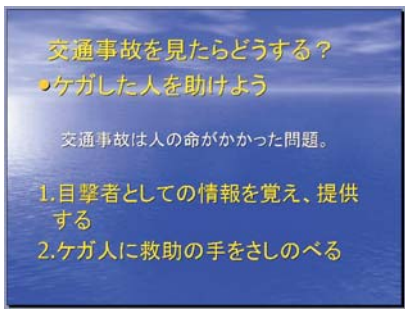
生徒が主体となって新入生に危険箇所を教える

教職員の「生徒を守る」という姿勢に呼応するように、生徒の自主的な活動も活発になる。明石清水高校の生徒会は夏休みに学校周辺の危険箇所の調査に取り組んだ。7月に学校全体で生活・防犯・交通に関するアンケートを行ったが、その際、生徒指導部が交通安全に関わる項目の集計結果を生徒会に示したところ、危険と思われる箇所を抽出し、自分たちの目で実態を確認することにしたのだ。調査の後、生徒たちは現場の地図や撮影した写真をパソコンのプレゼンテーション用ソフトで加工し、資料としてまとめ上げた。生徒会は今年度の新入生オリエンテーションでこの資料を用い、新1年生にプレゼンテーションを行った。「自転車通学に慣れていない新1年生を事故から守ってあげよう、という気持ちからだと思います。生徒の中にも交通安全のリーダーシップをとれる人材が育っています」と、生徒が主体となっての活動に新たな可能性を見い出している。

生徒たちの活動は地域にも広がる。10月下旬には、生徒会と教職員が3日間、近隣にある魚住小学校の前で「交通立ち番」を実施した。小学校の前が明石清水高校の通学路になっているため、『1列に並んで走行してください』という掲示を持って、登下校する生徒への注意喚起を行なったのである。小学校の先生方からたいへん感謝され、普段話すことのなかった地域住民からも声をかけられて、生徒たちも自分たちの行動が地域に理解され、地域社会の一員であることを自覚してくれたのではないかと、同校は評価している。

生徒の自主性を促進する一方で、ルールやマナー違反にはペナルティを科している。二人乗りや傘差し運転など、ルール違反をした生徒には従来はその場で注意するだけに留めていたが、平成18年度からはペナルティとして交通安全講習会への参加を義務づけた。講習会では警察署から借りたビデオを生徒に見せて、その感想を書いて提出してもらう。生徒が立ち止まって自分の行動を振り返ってもらうことを目的としている。





昨年6月に明石清水高校生徒指導部が行った交通安全講話で生徒に提示した資料（抜粋）。交通事故のあった際の具体的方法を説明した

明石清水高校の生徒会が夏休みに学校周辺の危険箇所の実態を調査し、まとめた資料（抜粋）

登下校時の立ち番指導の様子

毎月行っている登下校時の立ち番でルール違反した生徒を教職員が見つけた時は、後で必ず自己申告するように伝える。生徒が申告に来たら、叱るのではなく、なぜその行為が危険なのかを説明し、交通安全講習会への参加を告げる。「叱るだけで終わってしまうと、生徒たちは私たちの見ていないところで、またルール違反をします。ゆっくりと自分を見つめるチャンスを与えることが生徒の自覚を促すことになります」。ただし、申告に来ない生徒にはきちんと叱る。ルール違反についてではなく、申告に来なかったことについてだ。「自分に不都合なことでも、隠そうとせず、きちんと報告する習慣を生徒に身につけてほしいからです。生徒が生活の中で悩みや問題を抱えた時、私たちに相談しようという気持ちにつながると思います」。

新たな試みを実践して1年。地域住民からの苦情は3、4件にまで減ったものの、まだゼロではない。しかし、それまでは厳しい言葉ばかりだったものが、最近は『ここを直せば、もっと良くなりますよ』という生徒への期待が込められたトーンに変わってきている。「苦情は文句ではなく、まだ不十分な部分を改善するためのアドバイスだと、学校全体でもとらえています。1年間、生徒が努力したことで、地域の方々が高校を見る目は確実に変わってきました」。前田教諭は、こうした地道な努力が生徒の人間性を向上させ、結果として高校全体への評価を高めるとみている。

「高校生は交通安全に関心がないわけではありません。考えるきっかけがないだけなのです。だから、私たち教職員が『交通安全教育は難しい』と思い込まずに、積極的に生徒たちにきっかけを提供していくべきなのではないでしょうか。私たちが最終的なゴールをイメージさせることができれば、生徒たちは自分自身で考え行動し、そのゴールをめざします」。明石清水高校では、昨年度の取り組みを打ち上げ花火で終わらせないように、今年度、さらなる発展をめざす。

今までの自分に問題意識を持ってもらう

交通安全において、高校生に何を、どの

特集：高校生の交通安全教育――いま、高校生に伝えるべきこと

ように伝えたらいいか。学校教育以外で、この課題に取り組んでいる自動車教習所、高校生を雇用する企業の事例を紹介する。

（株）ドリームモータースクール（本社：長野県長野市）では、自動車教習所が地域の交通教育センターとして高校生のためにどのようなことができるかを考え、10年前から高校3年生を対象にした交通安全教室を始めた。現在は長野県内の5つの高校が、この交通安全教室を利用している。

普通自動車免許を取得できる年齢となる高校3年生に、自分の行動には自分で責任をとらなければいけないという交通社会人としての自覚を持ってもらうことを目的に交通安全教室は企画された。交通安全教室で指導を行うドリームモータースクール昭和の教育課課長補佐・大井純夫さんによると、高校生が最も関心を示すのが制動実験。引率の先生に教習車両を運転していただき、途中の見通しの悪い交差点を通過した時、クルマの前に人形が投げ込まれるというもの。クルマと人形が衝突すると驚きの声があがる。「実験の後、危険を発見してから、ブレーキをかけるまでに時間がかかる、運転のプロセスが『認知→判断→操作』であることを説明します。『クルマは急に止まれない』『道路に急に飛び出したら、クルマにひかれる』、これを知らない高校生はいません。ところが、『なぜ、そうなのか』を理解していないために、止まって

生徒が2人1組で、目隠しをした生徒をもう一人の生徒が安全に誘導する、目の不自由な方の立場に立ったドリームモータースクールでの歩行体験

安全確認をするという行動に結びつかないのだと思います」。

交通安全教室では、生徒の代表者数名が自転車に乗り、携帯電話でメールを打ちながら指定したコースを走るという体験や、目の不自由な方の立場に立った歩行体験もある。「見たり、体験したりして、ただ、『びっくりした』『怖かった』という印象だけでは不十分です。交通安全教室をきっかけに、高校生のみなさんが、今までの交通行動を振り返って、自分のやっていたことが周囲にどんな影響を与えていたか、自分自身に問題意識を持っていただくことが大切です。1つでも『ここは注意しよう』と意識や行動を変えていただくことが目標です」と、大井さんは話す。

高校3年生を対象にした交通安全教室で指導を担当しているドリームモータースクール昭和の教育課課長補佐・大井純夫さん

最近の高校生は、きちんと接すれば話を聞いてくれると大井さんは感じている。「学校によって、あるいはクラスによって、雰囲気が異なりますから、同じ内容を伝えるのでも、通り一遍ではなく、相手に合わせて少しずつ変えるように工夫しています」。

高校生は教えたことを守ろうと努力する

「ドミノ・ピザ」を展開する（株）ヒガ・インダストリーズ（本社・東京都千代田区）では、三輪スクーターで宅配を担当する高校生のアルバイトを採用している。高校生の場合は必ず新人オリエンテーションを受講してもらう。東京本部と大阪営業所にあるホンダライディング・シミュレーターに乗って走行してもらった後、コンピュータから出力される走行結果に示された内容を本人に伝え、アドバイスするという内容だ。同社営業部Domino's Universityスーパーバイザーの宗石英輝さんは、危険予測を考えた運転を身につけてもらうために、この教育を実施していると話す。また高校生の場合、自分の気持ちを抑えられず、自己中心的な運転をする傾向があるので、そうしたことに気づいてもらうことも目的としている。

（株）ヒガ・インダストリーズ・営業部Domino's Universityスーパーバイザーの宗石英輝さん

新人オリエンテーションには座学も1時間半あり、一時停止場所では停止線で1回、交差する道路の状況が見える場所で1回の計2回停止しなければならないこと、2段階右折の方法などを教える。高校生に必修としているのは、原付免許取得の際に、法規走行を勉強したといっても、それは試験に受かるために覚えただけの知識であり、免許を取ると忘れてしまいがちだからである。その部分のフォローも新人オリエンテーションの役割なのだ。

宗石さんが高校で教育してほしいと考えることは、基本的な交通ルール。「免許をお持ちでない生徒さんもいますが、歩行者や自転車利用者として守るべきルールは知っていなければならないはずです。免許保有者にしろ、非保有者にしろ、自分を危険から守るためにどうするべきかを教える必要があります。高校生は『死』に対する意識が低い。自分が交通事故で死ぬとは考えてもいないのでしょう。事故にあう、あるいは起こして、初めて考えます。軽微な事故ならまだいいのですが、相手や自分が死傷した場合には取り返しがつきません。アルバイトをする高校生は素直な方が多いと思います。言い換えるとすれば、真っ白なハンカチ、真っ白なキャンバスです。教えることで、どんどん染まっていきます。若い方のほうが素直で、私たちが伝えたことを守ろうと努力してくれます。高校生は知らないからやらないだけ。教えれば実行してくれるのが高校生です」。きちんと教えれば、高校生はそれを守ってくれると、宗石さんはアルバイトの高校生に数多く接してきた経験から語る。

地域との触れ合いから生徒の自主性を育てる

高校生の交通安全教育の基本は、「クルマ社会の一員としての責任と自覚を醸成することにある」と話すのは、神奈川県立藤沢西高等学校（神奈川県藤沢市）の先崎孝彦校長だ。かつて、神奈川県では高校生の二輪車利用において禁止・規制的な指導になりがちであった。先崎校長はそうした指導から、クルマ社会の一員として、高校生の自主性を尊重し、交通安全を自ら考える教育に、学校・家庭・地域が相互に協力連携して取り組む「※かながわ新運動」への転換を推進した一人である。

「クルマ社会の一員であるということは、高校生一人ひとりがクルマ社会を構成する主体であることを意味します。どのように主体性をもたせるのか。それには正しい知識、心の醸成、それに技術を教えないといけない。心の醸成とは、クルマ社会の一員としての責任と自覚を身につけるということで、本校では、生徒と地域との触れ合いを中心にすすめています」。

神奈川県立藤沢西高等学校の先崎孝彦校長

藤沢西高校では、地域との触れ合い教育として、高齢者などへのボランティア活動、保育園での実習、地域清掃、挨拶運動などを行っているほか、地区青少年健全育成協議会に協力して、年に1回、同校に地域の小学生200人を招いて、生徒がスポーツ、音楽、絵画などを教えている。「地域の小学生が慕ってくるので、生徒がとても喜んで接しています。地域の子どもたちが自分たちの身近な存在であることを意識することで、地域社会の一員であるという自覚につながるのではないかと思います。こうした触れ合い活動によって、通学路で自転車に乗っていても、地域の方々が自分たちと全く関係のない存在ではなく、身近だと感じることで走り方も違ってくるのではないでしょうか」。

かながわ新運動は今も続いているが、最近は、二輪車より自転車事故のほうが目立つという。同校も自転車通学者は全体の7割を超す。そうした状況で心の醸成だけでなく、正しい知識と技術もきちんと教えていかなくてはいけない。先崎校長は昨年、全校集会で「自転車の正しい乗り方」について、生徒に尋ねたところ、「安全に走ればいい」と答えが返ってきた。「では、どのように走ればいいかと聞くと答えられません。例えば、自転車通行可の歩道では車道側を走らなければいけないことを知らないのです。自転車はクルマと同じ車両であるという知識がない、このあたりが課題だと思います」。技術については毎年、PTAの交通安全委員会が専門家を呼んですべての自転車の点検指導を3日かけて行っている。自転車通行可の歩道での走り方については、教職員、PTA、生徒が年3回、朝、夕の通学時に歩道に立って指導する。横断歩道では自転車横断帯を通行する、歩行者に対してベルを鳴らさないといったルールやマナーを指導している。

「昨年の大雪の時、野球部の部員が自主的に学校周辺の歩道の雪かきをしました。歩行者や自転車が安全に通行できたと、地域の方々に喜ばれました。生徒が社会の一員として大切なことを自主的に、自分たちにできることを行う――これが交通安全を含めた安全教育の目標です。私たちはあきらめずに、生徒の自主性を育てる工夫をしていくことが大切だと思います」と先崎校長は語る。

※かながわ新運動＝高校生自身が主体となり、学校・家庭・地域が相互に協力連携して支援していく、高校生の、高校生による、高校生のための交通安全運動。神奈川県で「4＋1ない運動（「免許を取らない」「車を持たない」「車を運転しない」「車に乗せてもらわない」に「子どもの要求に負けない」を加えたもの）」を見直し、平成2年より実施されている。

※高校における交通安全の授業の教師用参考資料として、（社）日本自動車工業会が『Safety Action21　高校生の交通安全教育』を開発しました。
指導資料および生徒用資料は、以下のホームページよりダウンロードすることができますので、ぜひご利用ください。（社）日本自動車工業会のホームページアドレス：http://www.jama.or.jp/safe/safety/